大学教育だより

RDHE 2022.3 No.19
Center for Research and Development of Higher Education
ロゴデザイン：吉谷ひかり

大阪市立大学
大学教育研究センター
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
（全学共通教育棟5階）

これまでの記事は http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publication/ で読めます

大学教育だより No.19

Voice～学生の声 ● 文学部と医学部医学科の学生交流と座談会
Campus Inquiry ● 杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスの学修環境の紹介
OMU Education News ● 大阪公立大学教育ニュース！ OMUラーニングセンターの設置／OCUラーニングセンターのこれまでの取組
Center Now & Human ● 大阪市立大学 大学教育研究センターの活動・研究・スタッフ紹介

アン ロゾ（Un roseau）No.23：縦書き部分

● 福島 祥行 先生（大阪市立大学文学研究科） ● 星野 聡孝 先生（大阪府立大学高等教育推進機構）

Voice ～学生の声

文学部と医学部医学科の学生交流と座談会

文学部・文学研究科による学びの紹介

医学部学舎の施設・設備見学

文学部と医学部医学科は、キャンパスが杉本と阿倍野に分かれており、カリキュラムも大きく違います。今回の企画では、学びの共通点や相違点からお互いに学ぶため、2021年9月29日（水）に阿倍野キャンパス医学部学舎において座談会を行いました。また、座談会に先立ち、阿倍野キャンパスの医学部スキルスシミュレーションセンターと新型感染症検査室の見学会を行うとともに、文学部・文学研究科の学生・大学院生による学びの紹介や発表を行い、お互いの普段の授業や実習について知る機会を設けました。

座談会には文学部社会学コース・文学研究科社会学専修の学生6名（3年生5名、大学院生1名）、医学部医学科・医学研究科の学生7名（3年生5名、大学院生2名）が参加しました（うち文学部生1名、医学部医学科生1名はオンラインで参加）。大学教育研究センターからは飯吉弘子先生と橋本智也先生に加わっていただきました。座談会の全体進行は文学研究科の川野、医学研究科の金子が担当し、司会は文学研究科、医学研究科それぞれの大学院生が担当しました。

Voice ～学生の声

文学部と医学部医学科の学生交流と座談会

1. 見学会や発表内容への感想

【文：A】先ほどの見学会で聴診器のことを教えてもらったときに「冷たかったら言ってくださいね」と仰っていて、技術的なことだけじゃなくて気遣いの部分も配慮されているんだなと思いました。メンタルケアや接し方みたいなことって、実際に働いていく中で身につけていくのかなと思っていましたが、大学の授業で学んだりしているのでしょうか。以前、授業の課題で医療社会学の本を読んだときに、お医者さんとか看護師さんって接し方の戦略があるみたいなことが書いてあったのですが。

【医：B】はい、そういう授業はありますね。1年生のときにコミュニケーションの授業があったんですけど、それがすごくためになりました。特に、話し方というよりも聴き方なんですが、うなずき方やリアクションの仕方などを学ぶ授業でした。そのようなことを医学部に入って勉強できると思っていなかったので、とても新鮮でした。

他の授業ですが、先生が寸劇をされることもあります。あと、2年生のとき、授業におじいちゃん、おばあちゃんが来たんですよ。で、その人相手に模擬診察をしましょうというのがあって。そのおじいちゃんとおばあちゃんは、患者のプロなんです。

【金子】SP（模擬患者）ですね。

【医：B】はい。模擬診察が終わったら、「君、ここがだめだったね」みたいなことを教えてくれます。例えば、頭を診るときに、ぱっと触るんじゃなくて「ちょっと頭、触りますね」というようなことを言ったらいいよねとか。

【文：A】そこまで具体的な内容なんですね。ありがとうございます。

【医：C（修士1年）】ところで話は変わりますが、先ほどの文学研究科の発表で丹波篠山を研究テーマにされていましたよね。実は私も丹波篠山の出身なので、なぜ社会学の研究テーマに丹波篠山を選んだのかお聞きしたいです。

【文：D（博士2年）】研究指導をしていただいている川野先生が大阪都市圏で大きい調査をされていて、それと関連させる形で、関西圏の農村的な部分を含んでいる地域である丹波篠山市・丹波市を選びました。大きなテーマとしては地域活性化と決まっているんですけど、質的なフィールドワークをしているので、最初からリサーチクエスチョンを決めてから始めるというよりも、実際に人々を見ていく中で問いを立てて仮説を練っていきます。一方で、同じ社会学でも、量的調査だと最初からリサーチクエスチョンがあって、実験と同じように仮説を立ててからテストをして、結果はこうでしたとなります。地域と医療の関係で言うと、意外と社会学と医学って近いところがあるのかなと思います。社会関係資本という分野では、社会疫学といって、社会をみる疫学という視点もあります。

2. 学部学科・研究科、研究テーマを選んだ理由

2－① 文学部・文学研究科の学生の理由

【文：E】私がなぜ文学部の社会学コースに入ったかというと、高校のときに本を読んだりして、社会学か人類学がやりたいなと思っていたんです。それで国公立大で社会学が学べる市大の文学部を選びました。市大の文学部は、入学段階でコースを決めるわけではないんです。入学してから、1年生の12月に希望のコースを届け出て、それで2年生からコースに分かれて勉強することになります。文学部の中に学科が4つあって、学科の下にコースが13あります。その中の1つが社会学コースです。

【医：F（博士3年）】社会学と人類学にはどのような違いがあるんですか。

【文：E】人類学の調査法というのは基本的に質的調査なんです。例えば、外国のある村に行って、村の人たちと2年間一緒に生活を共にするような参与観察をするのが得意です。社会学は量的調査も質的調査も両方あります。

【文：G】私の場合、高校生のときに大学の体験授業があって、そのときに初めて社会学という学問を知りました。社会学は、みんなが今普通と思っていることを問い直す学問です、という話を聞いて、おもしろそうだなと思ったのがきっかけです。

【医：F】先ほど量的調査と質的調査というお話がありましたが、Gさんはどのような調査をされているんですか。

【文：G】私は質的調査をメインにしています。実習では、在日外国人の方にインタビューをして、それを最終的に調査報告書にまとめます。量的調査だと、対象者からの大量のアンケートデータを分析すると思うんですが、質的調査ではインタビューの文字起こしをして、そこで見られた発言から、今の外国人の方はこういうことに悩んでいる傾向が強いですね、みたいなことをやったりします。

【医：F】在日外国人の文化について知りたいと思ったきっかけは何ですか。

【文：G】社会の中のマイノリティーの人たちに興味・関心があるんですが、在日の外国人はマイノリティーなので、生活で困っていることとか、悩みとか、私たちとはまた違う悩みを抱えて生きていらっしゃるので、そういうことをインタビューで実際に知れたらいいなと思ったのがきっかけです。

【文：A】私はもともと獣医さんになりたいなと思っていて、動物心理学を学べるというのを知って大阪市大に入りました。それでずっと心理学コースを希望していたんですが、コース選択に当たって、あらためて自分のことを考えてみると、温室で育てられてきたというか、周りにある問題を自分とは全く関係ない他人事のように感じていたりすることに気づきました。先ほどGさんが言ったように、社会学では身の回りの当たり前を一度疑ってみることで、しっかり自分事として考えられるし、社会の問題をスルーする人間にならないんじゃないかなと思ったので社会学コースを選びました。

【文：H】文学部を選んだ理由ですが、大学選びのときには、やりたいことが絞り切れなかったんですが、社会学と文学と美術などが一緒にある大学ということで市大にしたんです。市大の文学部だったら1年間、いろいろな授業を取って、自分の好きなことをじっくり考えながらコースを選べるので。社会学コースを選んだ理由については、「労働と人権」という全学共通教育の授業で聞いた、労働問題の話や、不当な扱いを受けて貧困に陥っている人の話など、貧富の格差の問題にショックを受けて、そういう問題が生じる原因に興味を持ったのがきっかけです。専門教育の授業でさらに学んでいくと、教育、学歴、家庭の経済状況、雇用の賃金の男女差とか、社会的な要因が幾つも重なっていることを知り、それは理不尽なことやなって思いました。社会学コースでは、そういう問題に対して、自分で社会調査をすることで取り組むことができるとガイダンスで聞き、社会学コースしかないと思い、選びました。

【医：I】しっかりしてはる。

【文：H】（笑）

【文：J】私の母親は20歳になってから日本に来た中国人で、ルーツやアイデンティティは完全に中国にあります。父親は日本で生まれ育っていて日本語しか話せないんですけど、韓国籍を持っています。今までは自分の親が日本にいるのを当たり前のことと考えていたんですけど、大学で学ぶ中で、在日の方がいろいろ困っていることや、コミュニケーションの壁があることを知りました。自分の親も含めてですけど、在日の方が抱えている問題って自分が思っているよりも大きいし、そこを理解することって、今、多様性が重要と言われている中で大事なんじゃないかなと思っています。

2−② 医学部・医学研究科の学生の理由

【医:I】私は子供のころ体が弱くて、当時病院で担当してくれていた先生に憧れたから医者になりたいと思ったのがきっかけです。

【医:B】僕の場合は、医学って楽しそうというイメージくらいでした。

【文:D】楽しそうというのはどういうことですか?

【医:B】一番身近な自分の体のことなのに、よく知らないって不思議だなと。自分のことをもっとよく知れそうという意味で、楽しそうだなと思いました。

【医:K】私の場合は、幼いころに母が病気になって、それを治してくれたお医者さんがいました。そういう格好いいお医者さんになりたいなと思って、医者になりたいなと思いました。市大に入学する前には別の大学に入り、学部も医学部ではなかったんですが、医者になる夢を諦め切れなくて医学部を再受験したんです。今では、将来の選択肢として、医者の他に行政医師も魅力的な仕事かなって思っています。

【医:F】修士のCさんは、どのような理由で医学研究科を選んだのですか。

【医:C】学部時代は市大ではない大学で、学部も農林海洋科学部という、農学部と海洋学部が組み合わさったようなところで学んでいました。卒論で医学部の先生と一緒に医学部寄りの研究をすることになって、もっと本格的な研究をしたいなと思って市大の医学研究科に来ました。

3. 今後のキャリア、就職

【文:D】外科、内科など、希望する専門領域はあったりしますか。

【医:L】漠然と外科がいいと思っています。内科は、まだあんまり分かりません。

【医:I】卒業してから2年間、研修医の期間に、ある程度決めようかなという感じですか?

【医:L】そうですね。個人的には、今はまだ決める段階ではないのかなという感じがしています。

【医:B】高校生のころから、僕は何科がいいですみたいな人はいますけどね。

【医:I】人によるという感じですね、学部生は。

【医:F】では文学部の方で、医学部生に質問したいことはありますか。

【文:H】医学部に行くということは、医学関連の職業が多いと思うんですけど、医学部じゃなかったら、こんなことをしたかったとかありますか。

【医:B】高校のときに医学部に行くか、医学部じゃないところに行って官僚を目指そうか迷ったことはありました。医学部生の将来の話だと、多分、みんな同じような話になりそうなで、逆に文学部の方に聞きたいんですけど、文学部では仕事の話とか就職の話とかってされるんですか。

【文:H】私たち学部生は3年生で、おそらく現時点でなりたい仕事がはっきり決まっている人のほうが少ないかなと思います。民間就職なのか、公務員なのか。公務員なら、例えば市役所か教員かとか、大体は決めているとは思いますけど。

【文:G】そうですね。私の場合、社会問題のことを学んでいくうちに、そういうのに関わる仕事がしたいなって思うようになりました。公務員の仕事って、人の暮らしとか、生活とか、生きやすさに関わるものなのかなって思って、今は公務員試験の勉強をしています。

4. 一日を振り返っての感想

4−① 文学部・文学研究科の学生の感想

【文:G】医学部の施設・設備を見学したり、技術演習を体験させてもらったりすることは、なかなかできることではないので、今回の企画に参加して本当によかったなと思います。演習の体験では、なぜ医療器具をそこに当てるのかとか、なぜこの針を使うのかとか、それぞれ患者さんに向けた意味があるというのを知ることができて、医学の奥深さを感じました。

【文:H】医学部では座学だけではなく、様々な実践を通して経験を積まれているのを知ることができてよかったなって思います。

【文:A】普段、どのように勉強や実践をされているのかを知って、尊敬というか、あらためてお医者さんってすごいなって思いました。医学部の方って、入学する段階から将来の道をかっちり決めているのかなって思っていたんですけど、今日は、ざっくばらんに医学部を選んだきっかけや志望理由を話していただいて、すごくおもしろかったです。医学部の中でも人によって、いろんな道があるというのが意外でした。

【文:E】医学部の普段の授業がどのようなものかを知ることができました。医学部の皆さんは、こうやって医者というプロフェッショナルになっていくのかと思いました。あと、医学科の方とお会いするのが初めてだったので、最初は皆さん、どんな感じなんだろうと思ってたんですけど。(笑)

【医:I】どんなイメージが?(笑)

【文:E】医学の難しい話ばかりで、全然ついていけなかったらどうしようと思ってました。でも、皆さん親しみやすい方ばかりで、学びの中に共通点もあったりして安心しました。とても楽しかったです。

【文:D】私たち文学部・文学研究科の学生は、普段、阿倍野キャンパスに入ることはないので、医学部の皆さんに貴重な機会をいただけて、ありがたく思っています。聴診器ひとつをとっても、お医者さんはこんなことを考えて、こんなふうに聞こえているんだなと、すごく新鮮でした。皆さん、今日は本当にありがとうございました。(拍手)

4−② 医学部・医学研究科の学生の感想

【医:I】医学科は杉本キャンパスと比べて他学部の人たちとの関わりが限られていると思うんですが、今回交流させていただいて、皆さんしっかり目的を持って勉強されているのを聞いて、すごいな、見習わないとなと思いました。

【医:K】文学部の方と交流できて、とても楽しかったです。私はボランティアとかで交流を広げていくタイプなんですけど、結局、医学関係の範囲にとどまっている感じがして、ほかの学部の方と関わる機会があまりないなと思っています。今日はいい経験になったし、楽しかったです。また、社会学と医学で、公衆衛生系の分野に共通性を感じることができて、とても興味深かったです。

【医:F】僕は感染症に興味があるんですが、感染症って人との関わりがすごく強くて、人の生活様式や文化が理由になって感染症がおさまらない側面があると思っているんです。そういうのって医学だけで取り組んでいるんだと思っていたら、実は社会学の分野でも研究されているというのを今日初めて知って驚きました。自分の世界が広がったなと思っています。ありがとうございました。(拍手)

【飯吉先生】最後に、川野先生、金子先生からお願いできますか。

【川野】医学部と文学部というのは、キャリア形成という意味で、やはり随分違っていますね。文学部は入学段階で専門を決めないんですが、学生からはすごく評判がよく、入学後に専門を決めれられてよかったという声が多いんです。将来設計の段階というのが随分違うなと、改めて思いました。あと、私たち社会学は、実験ができないので調査をするんですが、考え方は医学とかなり似ている部分があるかなと思います。(拍手)

【金子】本日は阿倍野キャンパスまで来ていただいて、ありがとうございました。細菌学の修士・博士に来る学生は医学部の出身が少ないので、就職などの面では文学部と似ている部分はあるかなと思います。臨床医を目指すにしても、リサーチマインドは必ず必要になってきます。今回の企画のように他分野の視点からも学ぶ意識をぜひ持ってほしいなと思いました。ありがとうございました。(拍手)

[参加教員の感想]

シュミレーションセンターや実習、実験室を見学させていただいて、PCR検査や注射、診察など自分たちにも身近なものの背景に気づき、目を輝かせていた様子が印象的でした。交流でも活発な質疑応答があり刺激的でした。(川野)

学生同士の交流として重要であるだけではなく、教員同士の交流の場でもありました。非常に刺激的でした。医学部の学生も、意外と自施設のことを知らなかったりと、外から見られることで気づくことがあります。ぜひ、大学教育だよりのためだけではなく、このような交流事業が、恒例行事として行われることを期待します。(金子)

文責:大学教育研究センター兼任研究員　文学研究科　川野英二
大学教育研究センター兼任研究員　医学研究科　金子幸弘

Campus Inquiry

大阪市立大学と大阪府立大学を母体に大阪公立大学が誕生し、6キャンパス、1サテライトとなります。ここでは杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスの現在の学修環境を紹介します！

大阪公立大学では、大阪市立大学・大阪府立大学がこれまで培ってきた少人数で質の高い教育を継承し、研究を通じた学びにより専門的な知識・技能と幅広い教養を身につけるとともに、卒業後も生涯学び続ける力を育成します。杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスには皆さんの自主的・能動的な学修を支援するための環境や取組がたくさんあり、キャンパス間の連携や交流も行われています。大学での充実した学びを実現させるために、皆さんも積極的に活用してください。

杉本キャンパス

図書館である学術情報総合センター（通称：学情センター）の学修環境を紹介します。グループ学習用のオープンスペースである「ラーニングコモンズ」（写真左）では、可動式の机やイスを自由に組み合わせて、図書館資料やPCを使いながら、ディスカッションや共同作業、プレゼンテーションの練習などを行えます。学生・教員の垣根を越えた学術交流のための共有スペースである「アカデミックコモンズ」には、グループ学習などで自由に利用できるクリエイティブスクエア、グループ発表の準備などで1週間の連続利用ができるグループワークルーム、授業や20名以上のグループ学習に利用できるセミナールーム、交流や休憩で使えるラウンジがあります。「ツクルマ」（写真右）は「総合大学としての強みを活かして学部・領域横断の人的交流と知的交流を生み出す空間」をコンセプトに教職員と学生の共同で制作されました。ラーニングコモンズ、アカデミックコモンズ、ツクルマはいずれもコミュニケーションを通した自主的・能動的な学修のために設けられています。使い方はあなた次第です。目的に合わせて活用してください。

ツクルマでは友だちとグループ学習をしたり、お昼休憩に昼食を取ったりしています。自分たちで企画したイベントを開催することもできます。学生の交流の場として皆から人気です。

ツクルマは開放感のあるスペースで自由に出入りすることもでき、とても気に入っています。いろいろなセミナーやイベントがツクルマで開催されていて、興味を持ったものに気軽に参加しています。

図書館といえば、静かな空間を思い浮かべる方が多いかもしれませんが、ラーニングコモンズ、アカデミックコモンズ、ツクルマのように、活発に学びを深められるスペースもあります。みんなでディスカッションをして課題に取り組みながら、考える力や伝える力を身につけてください。

中百舌鳥キャンパス

中百舌鳥キャンパスには、総合図書館中百舌鳥を中心に3つの専門図書室と2つのラーニングコモンズ（写真右）など、目的に応じた様々な学習スペースがあります。総合図書館中百舌鳥には、通常の閲覧スペースの他、小グループで学習・研究するためのグループ研究室（5室；要予約）もあり、ディスカッションやプレゼンテーションのリハーサルなどに活用されています。また図書館カウンターでは、学内無線LANに接続可能なノートPCの貸出サービスも行っていますので、ラーニングコモンズ内での自主学習などにぜひ活用してください。この他、羽曳野キャンパス、りんくうキャンパスにも、それぞれ図書センター・図書室と学習スペースがあります。

図書館サービス以外にも、B3棟2階の数学相談室（写真左上）や理数e-Learning教室といった常設の学習支援拠点の他、国際交流会館〔i-Wingなかもず〕でのEnglish Caféなどの外国語学習の機会も提供されています。

B2棟にある「ラーニングコモンズ」はグループ学習をするのに適した場所です。「プレゼン室」（要予約）には可動式の机・イスやホワイトボードがあり、プロジェクターも完備されています。「ファミレス室」には、6人掛けのボックス席があり、グループで1つのモニターを使いながら、ディスカッションや資料の確認などができ、とても便利です。レポート・プレゼンテーション関連の本も設置されています。

C5棟にある「ラーニングコモンズ」ではホワイトボードを使いながらディスカッションをしたり、自由に配置できる広い机を使い、資料などをたくさん広げてゆっくり学習したりできます。パーティションで仕切られたパーソナル自習スペースもあります。出入口は全面ガラス張りになっていて、オープンで明るい雰囲気です。

大学では授業時間外の学習がとても大切とされ、先生から出された課題をこなすだけでなく、学生自身が積極的に学習・研究に取り組むことが求められます。キャンパスの各所に自主学習やグループ学習をするための施設・設備があり、さらに数学や理系基礎科目、外国語等の学習支援拠点もありますので、ぜひ活用してください。

大阪公立大学の開学に伴い、杉本キャンパス、中百舌鳥キャンパスの図書館の名称は、それぞれ「杉本図書館」、「中百舌鳥図書館」となります。両キャンパスともに、新型コロナウイルス感染症の影響で、施設・設備が利用できない場合や、利用方法などが変更になっている場合があります。

キャンパス間の連携・交流を進めています！

本学の教育改善の組織的な推進・支援を担う組織として、これまで大阪市立大学には「大学教育研究センター」が、大阪府立大学には「高等教育開発センター」があり、お互いに交流をしながら各種取組を行ってきました。大阪公立大学では、両センターを統合して、新たに「高等教育研究開発センター」が立ち上げられます。これまでの取組を発展的に統合・連携していく第一歩として、市大杉本キャンパスのメンバーが府大中百舌鳥キャンパスを訪問しました。前ページで紹介している学修環境を中心に、運営体制や学生の皆さんの活用状況などを見学し、お互いのキャンパスの学修支援について意見交換を行いました。大阪市立大学、大阪府立大学に在学している皆さん、大阪公立大学に入学してくる皆さんに、これまで以上に充実した学修環境や支援を提供できるよう、取組を進めていきます。

学生スタッフが学修支援の企画・運営で活躍しています！

杉本キャンパス、中百舌鳥キャンパスでは、学生スタッフ（学部生・大学院生）が学生目線を活かして学修支援や教育改善の企画・運営に携わるなど、様々な活動を行っています。また、大学統合に先立ち、両キャンパスの学生スタッフメンバーが交流する機会を設けて連携を進めています。ここでは、それぞれの活動について、学生スタッフの声を紹介します。具体的な活動内容は動画で公開していますので、下記のQRコードから是非ご覧ください。

学生スタッフの活動内容を動画で公開中です

Q. これまでの活動の中で印象的なものは？

A. 杉本キャンパス学生スタッフ（以下「杉本」）：ラジオ形式の生配信とオンラインの交流会を組み合わせたイベント「ゆるらじ」を行いました。ラジオでは授業や部活・サークル活動などについて、先輩学生たちが自身の経験を語ってくれました。いろいろな方に聞きに来てもらったり、直接質問や感想を聞けたりして、充実したイベントになりました。

A. 中百舌鳥キャンパス学生スタッフ（以下「中百舌鳥」）：大阪府立大学の応用生命科学類に所属する１年生を対象に実施した課程相談会が印象に残っています。また、学生と教員が参加する座談会の企画も行いました。どちらも企画や準備が大変でしたが、様々な経験ができて学ぶことが多く、企画に携わることができてよかったです。

Q. 苦労したことは？

A. 杉本：イベントを対面で行う場合は参加者の様子がよくわかるのですが、オンラインで行う場合は、画面越しなのでわかりにくい部分があり、参加後アンケートに頼ることがよくありました。そのため、対面と比べて、参加者の感想などのフィードバックを得られるまでに時間がかかる点が少し苦労しました。

A. 中百舌鳥：企画のテーマ設定と、企画書の作成に苦労しました。特に企画を立ち上げるときは漠然としたテーマから始めることが多く、企画の準備を進める中でテーマを明確にしていく過程が大変でした。また、自分たちが考えたテーマがイベントの参加者と話し手（教員）の両方にうまく伝わるように、企画書を何度も修正しました。

Q. 活動の魅力は？

A. 杉本：他の学生の学びを支援できることにやりがいを感じます！大学の学びについて自分自身の理解を深められることも魅力です。ラジオ収録などのイベント企画・運営、教材や周知ポスターといった資料作成など、学生スタッフとして活動に幅広く関わるので、得意なこと、苦手なことを振り返るきっかけにもなります。

A. 中百舌鳥：次の４つの魅力があると思います。①教職員の方々と協働できる、②自分で課題を発見して解決に取り組む力がつく、③企画書やメールなどの書き方が学べる、④自分が困っている学業の課題の解決につながったり、普段あまり馴染みのないことを学べたりする。例えば、応用生命科学類の課程相談会を企画・実施した際に、生物系の大学院生の発表を聞いて知見が広がり、生物系の学問も学んでみたいと思うようになりました。

Q. 活動を通して得た学び・成長は？

A. 杉本：学生スタッフの活動を始める前は消極的で人見知りでしたが、イベントを企画・運営したり、他の学生や教職員の方々と関わったりしていく中で、発想力やコミュニケーション能力を向上させ、積極的に行動できるようになりました！

A. 中百舌鳥：現状を把握し、課題がどこにあるのかを深く考えた上で企画書を作成するということができるようになりました。また、企画を実行するために必要な準備（参加者が集まりやすい日程・時刻の選定、教員との打合せ、部屋の確保、企画広報の内容など）について、しっかりスケジュール管理する意識が身に付きました。学生スタッフとして活動し始めて今年で４年目ですが、学生が何に困っていて、それをどのようにしたら解決できるかを日々考えるようになりました。

OMU Education News

大阪公立大学教育ニュース!

OMUラーニングセンターを設置

大阪市立大学は2018年に文科省のAP事業に採択されたのを機に、入学から卒業までの「学修成果の質保証」の取組の一環として学生の自主的・能動的な学修とそれを促す教育を支援するために、OCUラーニングセンターを開設しました。4月の新大学開学にあたり、中百舌鳥キャンパスの学生など更に多くのみなさんの主体的な学修の支援ができるように機能を充実させて、OMUラーニングセンター（教育学修支援室学修支援部門）として生まれ変わります。

大学での学修は、授業を受ける時間のみではなく、授業外の自学自習と合わせて行うことが重要です。OMUラーニングセンターでは、学生のみなさんが、自ら問いを立てて学ぶための支援を提供します。

OCUラーニングセンターのこれまでの取組

OCUラーニングセンター（以下LCと表記）では、特任教員および「SA・TA*1」という教育支援を行う学生の専属スタッフ、更には英語教育開発センターの先生方と理学研究科・数学研究所の博士研究員が、学生のみなさんの学修状況の振り返り、学修目標設定及び相談などの支援を行ってきました。例えば、「自分に合う英語の勉強の仕方を知りたい」「この数学の問題は解けるけどもっとスマートな解法はないだろうか」「どの科目を履修すべきかよくわからない」「授業についていけないけど、何が自分の問題なのか知りたい」「自分の今の成績で将来目指している状況に到達できるのだろうか」などの学修についての様々な質問や相談を受け付けてきました。

また学修教材「学びのTips」の作成・提供及び、学修支援に関するセミナーも企画・実施してきました。これらの活動は、SA・TAの学生目線の発想から生まれたものが少なくありません。そして、「学びのTips」の作成には、SA・TA、博士研究員、特任教員が共同で携わってきました。

その他、授業時間外に、自習や、授業準備のためのグループディスカッション、グループワークなどが行えるスペースを併設するとともに、教員のアクティブラーニング型授業の支援も行ってきました。

LCでの相談・支援活動プロセス自体が、取組にかかわるすべての教員・職員・スタッフ自身の学びと成長にもなっています。

OCUラーニングセンターではこんなサポートを行ってきました。

各サポートに関する情報はこちらから

■一般学修相談：LC特任教員などの専属のスタッフがレポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションの方法、大学での一般的な学修の相談などについて対応（スタッフによるレポートなどの添削は行いません）。また、学びの振り返りや学修計画の立案を支援。

■英語学修支援：英語教育開発センターの特任教員がサポート（大阪公立大学では、国際基幹教育機構の英語担当の先生方がサポート）。自主学修支援では、自分の英語の実力・目的に合わせた方法について先生と相談しながら自習メニューを作成し、継続的なアドバイスをもらえます。また、ライティングの支援では、毎月の課題ライティングの添削指導を受けながら弱点の克服のためのアドバイスをネイティブの先生からもらえます。

■学びのTips：自主学修のための教材を公開しています。学生を含むLCスタッフが大学での学修・生活に役立つ情報をテーマごとにわかりやすくまとめています。（詳細は次のページをご覧ください。）

■数学学修相談：杉本キャンパスの数学研究所の博士研究員がサポート。数学の自主学修の相談、授業の内容の確認、定期試験対策、つまずいているポイントを一緒に探しその解決方法を相談することが可能。ホワイトボード等を使って数式を書きながら親切に丁寧に解説。また、毎月課題と解説をLMSに掲載。実力チェックと理解度チェックに活用してください。

■イベント・セミナー：学生のみなさんが他の学生と学びながら交流できるイベントを実施。学生のみなさんの相談内容をもとに、SA・TA、博士研究員と共に企画・運営。これまでにレポートの基本内容に関するセミナー（詳細は次のページをご覧ください。）や日中文化交流に関する座談会、ディスカッション・ディベートの練習、一回生を対象にした初めての期末試験に備えるためのイベントなどを実施してきました。

■自習スペース：杉本キャンパスの全学共通教育棟で自習できる場所です。一人でも、複数人でも自習ができます。可動式の机やイス、ホワイトボードを自由に動かして使用できます。授業の準備、グループディスカッション・グループワークにもぜひ利用してください。学修に関して、専属の特任教員などに気軽に相談や質問などをすることができます。

*1 SA・TA とは、それぞれスチューデントアシスタント（学部学生）、ティーチングアシスタント（大学院生）の略称です。
どちらも本学の授業や教育活動をサポートすることが役割です。

相談以外にも学びに役立つ多様な支援を提供してきました!

OCUラーニングセンターの自主学修教材・イベント紹介

☞これを読むと、授業や課題に取り組むとき、助けになる!
大学での学びをもっとレベルアップできる!

自主学修教材「学びのTips」

レポートの書き方、プレゼンの仕方、質問の仕方など、自学自習や大学生活で役立つ情報・ポイントをテーマ毎にまとめた教材です。また数学の深い理解を促す数学編もあります。学生を含むLCスタッフが共同で、学生の相談内容やSAの経験をふまえて作成し、学内で公開・開架しています。現在40種以上あり、その中からいくつかを紹介します。

DLはこちらから

〈一般学修編〉

先生への質問や相談の仕方

学びを深めるために、授業に関する質問は積極的に行いましょう。「でも大学の先生にはどんな風に質問したらいいの?」そんな新入生が抱きやすい疑問に答えます。

レポート課題に取り組む手順

大学で初めてレポート課題が出たとき、何から始めればいいか戸惑う方も多くいます。このTipsでは、レポート課題に取り組む際の基本的な手順を示しているので、計画的・効率的に課題を進めるための助けになります。

資料の探し方　大学図書館の使い方

大学での学びには自分で資料を探して読む、というステップが非常に重要です。まずは図書館の活用方法をマスターしましょう。学術情報総合センターの協力で、わかりやすくまとめています。

レポートの構成―基本編

レポートを書く際に重要な構成・アウトラインの考え方、注意点を簡潔に示しています。構成を意識して書くことでレポートは格段にレベルアップします。

読みやすい資料のつくり方

大学では自分で資料を作る機会も多くあります。内容はもちろん重要ですが、読みやすくすることも大切です。学生スタッフが自身の経験を踏まえて企画・作成したTipsです。

「キャリア」ってなんだ?

キャリアとは、就職に関することだけではなく、一人一人の「人生の一連の経験全体」を指す大きな概念です。大学でキャリアについて考えることの意味と、その方法・サポートについてまとめたTipsです。キャリア支援室の協力で、LC学生スタッフによる室長インタビューも掲載。低年次から役立つ情報です。

〈数学編〉

数学の実力把握や復習に役立つ教材、発展的内容の教材などを多数公開（例:大学の数学の勉強、線形代数の活用例（力学）、数列の収束）。単元や用途に対応したTips を見つけるための「数学編Tipsマップ」もあります。

レポートをもっとよく書けるようになりたいな

☞基本をしっかり確認できる! 個別相談でさらにレベルアップ!

レポート執筆セミナー「レポートのいろは」（学術情報総合センターと共同開催）

大学での学びにおいて重要となるレポートの書き方を習得するためのセミナーを毎期実施してきました。
左記「学びのTips」のレポート関連のものを使いながら、ラーニングセンターと学術情報総合センターのスタッフが参加学生に詳しく説明。2020年度からはオンデマンド形式で動画公開も行い（2021年度13本公開）、多くの学生に視聴されています。また遠隔授業期間にはインターネット上の情報の活用方法など、状況に合わせた内容を随時追加して、みなさんのレポート執筆をサポートしてきました。
さらに、スタッフに直接質問や相談を気軽にできるイベントも開催してきました。レポートをさらにレベルアップさせることを目指して、積極的に活用されています。

色々な学生と交流したいな

☞ここなら気軽に話せる!

オンラインでのイベント・セミナー

2020・2021年度は対面でのイベント実施が難しい中、オンラインで学修支援・学生交流の機会を提供すべく、色々な企画を実施しました。今後も状況に応じてより良い方法を模索しながら、学生のみなさんの支えになる企画を行っていきます。

〈実施したオンラインイベントの例〉

- 交流イベント「オンラインカフェ」
- レポートのいろは（右上参照）
- 数学なんでも相談会
- プレゼンテーションセミナー＆体験会
- 学生生活ラジオ「ゆるらじ」での先輩の体験談の発信　など

参照

こんな時、先輩たちはどうしてたんだろう?

☞複数学部の先輩の、様々なジャンルの話が聞ける!

学生スタッフによる学びや学生生活のラジオ動画

※学生スタッフの活動への思いはp.5をご覧ください

学びや学生生活に関する先輩の体験談やラフなトークをラジオ形式の動画で公開。
イベントへの参加が難しくても、隙間時間に気軽に聴けるようにと学生スタッフが企画しました。

〈アーカイブ動画一覧〉

視聴はこちらから

- Talk about Campus Life（コロナ禍での体験談・学びのヒント）
  ① 履修登録について
  ② 試験・レポートについて（前編）
  ③ 試験・レポートについて（後編）
  ④ Word を使う際の注意点やコツ
  ⑤ 特別編：1回生インタビュー（2021年オープンキャンパス動画より）
    1. 大阪市立大学に入ってよかったこと（理学部1回生）
    2. 大学受験について（生活科学部1回生）
    3. 下宿・杉本キャンパス周辺の環境について（文学部1回生）
- 学生生活ラジオ「ゆるらじ」
  ① 前期どうだった?（授業・試験などの振り返り）
  ② 夏休みどうする?（夏休みの過ごし方・後期に向けてのアドバイス）
  ③ 部活・サークルどうしてる?（上回生をゲストに活動・学びとの両立などをインタビュー）

Center Now & Human

大阪市立大学 大学教育研究センターは「こんなこと」に「こんなメンバー」で取り組んできました!

ここでは大学教育研究センターの活動を紹介します。大阪公立大学では、大阪市立大学の大学教育研究センターと大阪府立大学の高等教育開発センターを統合して「高等教育研究開発センター」を設置します。両大学の旧センターでは、教育の改善に向けた、様々な全学的FDの事業・活動を行ってきました。これまでの取組の蓄積を活かしながら、これからも学生や教員の特性と状況・ニーズにあった、教育の改善や多様なFD活動を行っていきます。

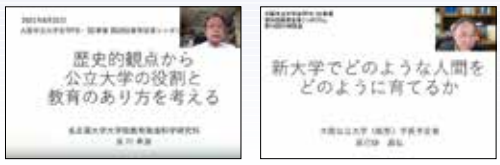
FD（Faculty Development）活動

（1）FD研究会（年１回）

FD研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための学内外の教育改善・FDの取組の紹介や、本学の教育のあり方に関する全学的な情報共有や議論を深める場として設定されてきました。例年、100名前後が参加してきた大きな研究会です。2021（令和3）年度、第19回の全体テーマは「**大阪市立大学の教育改善・内部質保証に向けた取組の総括と今後への展望**」でした。

（2）教育改革シンポジウム（年1～2回）

教育改革シンポジウムは、大学をめぐる多様な課題について、大学内外の情勢を鑑みながら全学的に考えを深めることを目的に開かれてきました。2021（令和3）年度、第29回は全体テーマを「**公立総合大学としての役割と教育のあり方について ― 新大学大阪公立大学で、どのような人間を、どのように育てるか ―**」とし、吉川卓治先生（名古屋大学大学院）からご講演「歴史的観点から公立大学の役割と教育のあり方を考える」を行っていただいた後、辰巳砂昌弘先生（大阪府立大学学長、大阪公立大学学長予定者）から「新大学でどのような人間をどのように育てるか」と題してコメントをいただきました。



（3）FDワークショップ・大学教育研究セミナー（年数回）

FDワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式やラウンドテーブル形式により、主に学内の参加者間で授業デザイン事例など教育実践事例や大学教育に関する研究活動の成果の紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されてきました。

研究成果の発信と広報

（1）大阪市立大学大学教育研究センター紀要『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に1～2回発行する査読付き学術雑誌です。センターのFD活動・研究活動の報告の場でもあります。

（2）大学教育だより & Un roseau（アン ロゾ）ほか

本学の学生・教員および学外の方々に、総合大学である大阪市立大学における様々な教育の取組と、学生の学びの様子や可能性を知っていただくための教育広報誌『大学教育だより』と、本学での学びの道しるべとしての全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を、2006年度から合冊発行し広く学内外に配布してきました。また、OCUラーニングセンターと協同で『新入生のための学びのスタートガイド』も発行してきました。

センターが関わってきた研究活動

（1）入試と学修の関連および学修の評価に関する研究

本学で学ぶ学生・院生の学修成果の状況を把握し、教育のさらなる充実や改善につなげていくために、学士課程・大学院課程の在学生と卒業生・修了生に対するアンケート調査やインタビュー調査などを実施してきました。また、入学者追跡調査を実施するとともに、入試選抜方法や入学後の教育のあり方に関する研究も行ってきました。それら調査研究の結果は、報告書にまとめたり、FD企画で発表したりして学内での共有にも努めてきました。成績評価結果をもとに学生一人ひとりが何を身につけてきているのかを自身のキャリアデザインも踏まえて把握できる仕組みであるOCU指標の開発にも協力してきました。

（2）教育実践・カリキュラムの開発と評価に関する研究

①**学修支援推進関連：**教育開発支援室（通称「OCUラーニングセンター」）に協力しながら、自主学修補助教材やTA・SA育成プログラムの開発研究、アクティブラーニング型授業開発支援およびOCU指標を用いた学修支援に関する研究などを行ってきました。

②**大学院共通教育関連：**大学院の研究科を超えて履修可能な大学院共通教育科目の制度立ち上げや構築にこれまで関わってきました。また、大学院共通教育科目のキャリアデザイン系の講義・演習科目などの開発と提供を行ってきました。

③**学士課程における横断型教育プログラム関連：**「大学での学び」への円滑な移行のために行われる初年次教育（学士課程導入教育科目など）の全学的質保証に関わる仕組みづくりへの協力や、全学共通教育における初年次教育関連科目の提供を行ってきました。また、副専攻プログラムの質保証（評価のあり方研究など）にも協力してきました。

（3）本学の教育改善・FDに関する調査研究

大阪市立大学では、FD（ファカルティ・ディベロップメント）を、「学生が真に学べるように質の高い教育を維持し一層向上させるための、構成員全体（教員・職員・学生）の自律的で組織的な取組」として捉えています。本センターでは、全学の教育改善・FDを企画推進するとともに、近年急速に活発化している各学部など部局での教育改善・FDの取組への協力支援も行ってきました。また、本学教員の教育・FDの日常的活動状況や意識の調査・分析を定期的に行うとともに、集まった教育実践事例を教員相互で活用し合えるWEBデータベースも開発し公開しています。

（4）その他、学内の教育研究・教育改善・開発ニーズに基づく研究

上記以外に、学内ニーズに基づく各種調査・研究活動も行ってきました。

①全学と学位プログラムごとの3ポリシーの点検・改訂支援、②教育評価方針と計画の策定支援、③本学の教学IRなど、教育の内部質保証システムの構築支援、④ポストドクター向け大学授業実習制度の開発・実施協力、⑤博士・修士人材向けキャリア形成支援の開発・推進など。

教育開発支援室の運営に協力してきました!

文部科学省のAP事業のテーマⅤ（卒業時における質保証の取組の強化）に、本学の取組である「OCU指標とその活用スキームによる学修成果の質保証」が2016年に採択されました。事業の一環として、学生の自主的・能動的学修を促し、効果的な教育の実施をサポートする学修支援推進室（通称「OCUラーニングセンター」）を開設しました。補助期間終了に伴い、同室は教育開発支援室へと発展的に改組されました。本センターは、AP事業への申請から事業に協力するとともに、2020年4月に発足した教育開発支援室の運営にも参画してきました。なお、2022年4月から「教育学修支援室」を新たに開設します。

大学教育研究センター紹介

RDHE Osaka City University Center for Research & Development of Higher Education

大阪市立大学 大学教育研究センター

大阪市立大学 大学教育研究センターは、大学を取り巻く新しい環境の中で、社会の進路を見据えた大学教育のあり方を実現することを目指して研究と開発をすすめるために設立されました。
以下の運営体制（左図）のもと、３本の研究の柱を基本に据えつつ相互に強く関連をもつ各種プロジェクト（右図）に取り組んできました。

大学教育研究センターの研究

大学教育研究センターの運営体制

所長　教育・入試担当副学長

大学教育研究センター
副所長（専任研究員）・専任研究員・兼任研究員

教学・FD部門	評価部門	調査・研究部門
全学FD 横断型教育	学修評価 大学評価	調査研究 教学IR

大阪市立大学大学教育研究センター規程第３条（事業）
(1) 大学教育に関する**研究、調査、企画、提案、及び提言**に関すること
(2) 大学教育に係る**点検、評価及び改善**に関すること
(3) **教育方法の開発、教育・学修支援**及び**全学的FD推進の支援**並びに**各部局等へのFD支援**に関すること
(4) **その他**前条の目的を達するために必要な事項
（平成31年４月1日から施行。）

高等教育の制度やその役割についての研究
（1）学士課程教育システムのあり方
（2）学生相談・学習相談システムのあり方
（3）社会における大学のあり方
（4）生涯学習社会における大学のあり方

全学的FD活動
各種研究プロジェクト

カリキュラム・教育方法の開発に関する研究
（1）学士課程のカリキュラムおよび教育方法の開発
（2）初年次教育カリキュラムのあり方
（3）授業改善支援システムのあり方

大学教育の評価および教員評価のあり方に関する研究
（1）大学教育評価のあり方
（2）大学教員評価のあり方
（3）FD活動のあり方

大学教育研究センタースタッフの紹介（令和４（2022）年３月現在）

■所長
鈴木 洋太郎
副学長

■専任研究員
飯吉 弘子
副所長 大学教育研究センター教授
研究分野：社会における大学のあり方に関する研究／教育学／大学教育史

西垣 順子
大学教育研究センター教授
研究分野：大学教育の評価に関する研究／教育心理学

平　知宏
大学教育研究センター准教授
研究分野：データに基づく教育改善／高大接続研究／認知科学

橋本 智也
大学教育研究センター准教授
研究分野：Institutional Research（IR）／大学教育の質保証／心理言語学

■兼任研究員
橋本 文彦
経済学研究科教授

小柿 徳武
法学研究科教授

福島 祥行
文学研究科教授

川野 英二
文学研究科教授

北村 昌史
文学研究科教授

水野 寿朗
理学研究科講師

谷口 与史也
工学研究科教授

鍋島 美奈子
工学研究科教授

大西 克実
工学研究科准教授

金子 幸弘
医学研究科教授

永村 一雄
生活科学研究科教授

畠山 典子
看護学研究科講師

■事務局
岡崎 哲子
教育推進課長

竹澤 直之
教育推進課係長

大谷 敏恵
教育推進課員

編集後記

大阪市立大学の教育広報誌『大学教育だより』と全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を今年も発行しました。大阪公立大学が開学となることから、大阪市立大学として発行するのは今号が最後となります。大阪市立大学・大阪府立大学の在学生の皆さん、大阪公立大学の新入生の皆さん、先生方、学外の方々に向けて、大阪市立大学と大阪府立大学の教育・学修の多様な環境や取組を紹介する内容となっています。『大学教育だより』の「VOICE」では、文学部・文学研究科と医学部・医学研究科の学生の皆さんが阿倍野キャンパスの医学部学舎で施設・設備の見学・紹介と座談会を行い、それぞれの専門分野の学びの違いや共通点などについて活発な議論を行いました。この企画は、総合大学における多様な学生の多様な学びを実感してもらいつつ、自らの学びを振り返ってもらうことを意図して長年実施してきました。「Campus　Inquiry」では、大学統合による新大学の開学というタイミングもあり、大阪市立大学（杉本キャンパス）と大阪府立大学（中百舌鳥キャンパス）の学修環境、キャンパス間の連携・交流や学生スタッフの活躍の様子、ラーニングセンターの学修支援や具体的な取組など、両キャンパスを幅広く紹介する内容となっています。『アン ロゾ』では、大阪市立大学文学研究科の福島先生と大阪府立大学高等教育推進機構の星野先生に学生の皆さんに向けたメッセージをテーマとしてご執筆いただきました。本誌が学生の皆さんの学びの道しるべになれば嬉しく思います。（橋本）

編集委員：橋本 智也・飯吉 弘子・川野 英二・金子 幸弘